

重要な構成要素「柴又用水跡（本流部）」

＜^{たいしゃく}帝釈橋跡＞

農地開発を支えた社会基盤

1835（天保6）年に開削されたと伝えられる柴又用水は、現在の葛飾区水元にある小合溜井^{こあいだめい}を水源とする小岩用水から分岐し、東西方向に発達した微高地の南側の落ち際に沿うように開削されています。この柴又用水は、江戸時代から昭和初期にかけて柴又地域南部の農業開発・経営を支えた社会基盤として重要な存在でした。柴又八幡神社^{はちまん}には、柴又地域の農耕水利開発の功績を讃える記念碑として1873（明治6）年に柴又用水の碑が建立され、その歴史を今に伝えています。

現在では、ほぼ全ての水路が埋め立てられましたが、その大部分は道路敷地に転用され、歩道等として利用されているため、水路を骨格とした土地の区画など空間構造が良く保たれています。

この区間は、柴又用水の本流として機能した区間の一部であり、かつては水路を跨ぐ5橋（西から帝釈橋、柴又五橋、井沼橋^{いぬま}、中之橋^{でど}、出土橋）水路の埋め立てに際して、橋梁も撤去されましたが、橋名板が現地に保存され、親柱風モニュメントが設置されるなど、水路を跨ぐ橋の記憶を保つ造作がなされています。

この場所は、かつて帝釈橋があったところです。実際に水路と橋がイメージ復元され、当時の風情^{ふぜい}を感じさせてくれる一角となっています。



柴又用水の碑（八幡神社境内）



昭和5年の耕地整理に伴う柴又用水の再整備（個人蔵）